ｅ社会はいい社会？

デジタル革命

デジタル革命が進行している。デジタル・テクノロジーに支えられる経済の仕組み、会社の在り方、マーケットのルールなどを総称してデジタル社会とかデジタル経済と呼んでいる。

デジタル革命はアメリカのニュー・エコノミーの基礎になっているが、一つのテクノロジーだけで生産性の向上、ニュービジネスの誕生、雇用形態や産業構造の変化が起こるのではなく、その変化を実現していく社会的な仕組みも重要となる。

レゴブロックのアメリカ社会

アメリカの社会はある意味ではレゴの社会で、会社や組織に特有な技能や知恵よりも、どこでも通用する技能や知恵の方が重要視されてきた。標準化された技能を身に付けた人が多く、必要に応じ人を集めてチームを組み、目的を達成すると解散する。おもちゃのレゴブロックのようだ。こうした素地があるので、デジタル革命が起こると柔軟かつ迅速な対応で組織やマーケットなどが動いていく。

それに比べ、我が国では組織の人間関係の中で身に付ける技能が大切にされた。いわゆる日本型の組織・経営・雇用形態は、合意の形成に時間がかかるが、合意の実行には都合がいい。

世の中がゆっくりと秩序を持って動くときは、日本型経営がもてはやされたが、今のように革命と言われるほど激変しているときは、逆に弱みになる。

ｅ社会とは？

デジタル・テクノロジーを中心に動くのがデジタル社会で、コンピュータを中心にしたサイバー社会はこれに含まれる。ネットワーク社会はもう一つ大きな概念で、技術がデジタルであるか否かは問わない。ネットワークとデジタルとが重なっている部分がデジタル・ネットワークである。これがコンピュータのネットワークで、インターネットはここに入る。サイバーでありデジタルでありネットワークである社会、すなわちインターネットに象徴されるように、コンピュータと通信とのネットワークがつながって、それが社会の基盤になっているような社会がｅ社会である。

ＩＴ

最近、ＩＴがよく登場するが、アメリカではＩＴ、ヨーロッパではコミュニケーションを付けてＩＣＴと言っている。

そこで日本の新聞などでは、ＩＴ（情報通信技術）として、通信という言葉を入れている。

ネットワークは、基盤があり、基盤の上に信号処理のＯＳがあり、場を提供するソフトがあり、その上に実際に取引される商品や情報が乗っている四層構造をしており、ひっくるめてＩＴと呼んでいる。ＩＴ技術の発達とともにビジネス、マーケット、教育、医療、文化、社会などが大きく変化しようとしている。

インターネットの仕組み

インターネットについては二つの考え方がある。一つはネットワークありきで、ネットワークにコンピュータが端末としてぶら下がっているという発想。

もう一つは逆の発想で、パソコンのプリント配線が全地球を覆っているのがインターネットで我々はその中に住んでいると考える。インターネットに接続して情報を活用しているのではなく、人の頭脳も地球大のグローバルコンピュータの部品になったと考えることもできる。

デジタル技術と著作権論争

最近話題になったソフトに「ナップスター」や「ヌーテラ」がある。これらは楽曲をうんと圧縮して転送したり再生することができ、これを使って好きな曲をお互いに交換してただで聴くことができる。「ヌーテラ」は音楽ソフトのほかビデオ、テキスト、ＣＡＤ、ＣＡＭもやりとりできる。これに対し全米レコード業協会は、このソフトを作り、サイトを運用している会社を、不正コピーを助長し著作権を侵害していると訴え、法廷闘争が続行中である。

デジタル時代の著作権の経済学

著作権を守るため、電子透かし技術の導入や不正コピーの防止協定の締結などの動きがあるが、これは古い発想である。デジタル・テクノロジーは限界費用ゼロで完璧なコピーができるのが特徴で、それに制限を加えるのはテクノロジーの本質と相いれず、時間稼ぎにすぎない。それよりも、手直しではなく全く新しい著作権法をつくるのが先決である。

アーティストに報酬を支払うのは当然のことだが、一方、出来上がったデジタル信号はただでコピーができるので、値段はゼロになる。どうすればいいのか。これがデジタル時代の著作権の経済学である。

音楽を聴いた人たちの心には音楽を聴

いた喜び、いわゆる消費者余剰が生まれている。この消費者余剰と、アーティストに必要な報酬とをどうつなぐかを考える。 ヒントの一つは、アメリカのＥミュージック社の基本料金は月額十ドルだが使用料はゼロというやり方。民放方式もある。ウエブサイトの広告収入で著作権料を賄い、コンテンツはただで、聴くのもコピーして使い回すのも自由とする。

ＩＴ革命の本質

ＩＴ革命の革命とは権利の再定義である。ブルジョア革命、奴隷解放、農地改革などのように権力および所有権の大幅な移動が引き起こされるのが革命の本質である。インターネットやＩＴやｅ社会においては、権利の大幅でドラスティックな再定義が起こる。これが、いわゆる流通業者の悲劇だとか、中間管理職の悲哀だとか言われている。

インターネットは一過性か

インターネットに代表されるテクノロジーは一時のブームで、一過性だという人もいるが、そうではない。次世代通信インフラはインターネットを土台に築かれる。グーテンベルグの印刷機が発明され、宗教改革が起こり、その後産業革命が起こって、後戻りしなかったようにネット社会も後戻りしない。

ｅ社会はいい社会？

いい社会のシナリオとしては、民主主義が進み、行政が効率的になり、意思決定が効率的になり、消費者が復権し、新しい価値が創造され、新しい文化が育ち、連携と生きがいが生まれる社会になる可能性がある。

悪い社会のシナリオとしては、過敏で不安定な社会になる。人々の気持ちも不安定で、会社の好、不況の波も激しく不安定で過敏な社会になる。デジタル・デバイドが広がり、反動が勢力を得てくる可能性もある。社会運動として、宗教、言語、民族などへの回帰が起こるかもしれない。これをどううまく操っていくかが大切である。

ｅ社会は、法律では制御できない。結局のところ個人の心の持ちようという古くて新しい問題に突き当たる。このネットと付き合うときの作法や倫理を無視して暴走するところが出てくると、悪い方のシナリオになる。

これからの社会を力を合わせて住みやすい社会にしましょうというのが今日の結論である。

（本稿は講演の一部を編集部で要約したものです。）

第 21 回Ｋａｍｐｏ資金セミナー

２０００年９月６日開催